

「日本のいちばん長い日」

＊＊＊

2015(平成27)年8月16日鑑賞<梅田ブルク7>

監督・脚本：原田眞人

原作：半藤一利『日本のいちばん長い日 決定版』(文春文庫刊)

阿南惟幾(あなみこれちか)(陸軍大臣)／役所広司

昭和天皇／木本雅弘

鈴木貴太郎(内閣総理大臣)／山崎努

迫永久常(内閣書記官長)／堤真一

畠中健二(陸軍少佐)／松坂桃李

阿南綾子(阿南惟幾の妻)／神野三鈴

井田正孝(陸軍中佐)／大場泰正

下村宏(國務大臣兼情報局総裁)／久保耐吉

東條英機(陸軍大将)／中嶋しゆう

絹子(陸相官舎付女中)／キムラ絹子

阿南喜美子(阿南惟幾の長女)／蓮佛美沙子

鈴木一(秘書官)／小松和重

米内光政(海軍大臣)／中村育二

安井藤治(國務大臣)／山路和弘

平沼騏一郎(枢密院議長)／金内喜久夫

左近司政三(國務大臣)／鶴川てんし

高嶋辰彦(陸軍少将)／奥田達士

大西瀧次郎(海軍中将)／嵐芳三郎

梅津美治郎(陸軍大将)／井之上隆志

木戸幸一(内大臣)／矢島健一

田中静庵(陸軍大将)／木場勝己

藤田尚徳(侍従長)／廣赤兒

荒尾興功(陸軍大佐)／田中美央

竹下正彦(陸軍中佐)／関口晴雄

椎崎二郎(陸軍中佐)／田島俊弥

藤井政美(陸軍大尉)／戸塚祥太

入江相政(侍従)／茂山茂

三井安彌(侍従)／植木潤

保科武子(女官長)／宮本裕子

保木玲子(技術員)／戸田恵梨香

館野守男(放送員)／野間口徹

皇后／池坊由紀

佐々木武雄(陸軍大尉)／松山ケンイチ

森赳(近衛師団長)／高橋耕次郎

2015年・日本映画・136分

配給／アスミックエース、松竹

<1967年の岡本喜八版VS2015年の原田眞人版>

私は岡本喜八監督、三船敏郎主演の『日本のいちばん長い日』(67年)を大学時代に松山に帰省している時に鑑賞し、大きな衝撃を受けた。終戦記念日=玉音放送というのをごくあたり前のように受け止めていたのに、実はその背景にはこんな1936年の「2.26事件」のような一部青年将校の決起(反乱)があったこと、そして自分がそれを全く知らなかったことに衝撃を受けたのだった。以降、当時東宝が制作していた「終戦記念日モノ戦争大作」を明確に意識して鑑賞するようになったが、それから48年後そして戦後70周年の今年、原田眞人監督版が再登場してくることになった。

昔は、その原作が半藤一利氏の『日本のいちばん長い日』(但し当時は大宅社一監修)であることも特に意識しなかつたが、今では半藤一利氏のことはよく勉強して知っている。両者の最大の違いは、岡本喜八版は1945年8月15日の1日だけの描写に集中したのに対し、原田眞人版は原作どおり終戦の4ヶ月前から、つまり、昭和天皇(木本雅弘)が鈴木貴太郎(山崎努)に組閣を命じるところから、8月15日の玉音放送に至るまでの動きをフォローしていることだ。したがって、「先の大戦」のことをほとんど知らない若い世代でも、本作を観れば、①鈴木貴太郎による組閣、②陸軍大臣に就任した阿南惟幾(役所広司)の苦悩、③ポツダム宣言受諾に至るまでの閣議の論点や議論の様子、④昭和天皇の「ご聖断」の意味、⑤玉音版をめぐる畠中健二少佐(松坂桃李)ら決起部隊の「反乱」とその失敗、⑥今年の夏、何度も聞いた昭和天皇によるあの玉音放送までの動きがよくわかる。それはそれでいいのだが、その分、本作は教科書のような感じが強く、映画のつくり方としてはイマイチ・・・?

<映像上も物語上も、昭和天皇がこれだけのウエイトを!>

本作はいわゆる「青春群像劇」ではないが、パンフレットで原田監督が「昭和天皇と阿南惟幾陸相、そして鈴木貴太郎首相の3人を中心とする“家族”的ドラマです」と言っているように、この3人を中心とし、歴史上の動きにあわせた人間ドラマになっている。後半は畠中少佐ら決起部隊による「反乱」というドラマティックな要素も入ってくるが、前半はホントに淡々と歴史的事実に沿って、原田流解釈に沿った人間ドラマが展開していく。したがって、味本作を鵜呑みにすると、鈴木貴太郎首相はこんな人、阿南惟幾陸相はこんな人、そして昭和天皇はこんな人だったんだと思い込んでしまうが、それは危険。本作が描く3人の人物像と、この3人が展開する「家族ドラマ」はあくまで原田監督の視点によるものなのだ(にすぎないのだ)ということを十分認識する必要がある。

岡本喜八版においては、松本幸四郎が演じた昭和天皇はほんの少し姿を見せるだけで、あくまで闇のペールにつつまれていた(?)が、『昭和天皇実録』が公表された今となっては、昭和天皇についても情報公開はいかようにもオーケーとばかりにその人物像が原田監督の視点で描かれる。そりや、イエス・キリストだって、『ベン・ハー』(59年)ではホンの少ししか登場しなかったが、『パッション』(04年) (『シネマーム4』261頁参照) や『サン・オブ・ゴッド』(14年) (『シネマーム35』296頁参照) では、その全体像を堂々とスクリーン上に見せていましたから、昭和天皇だって・・・。

しかし、今の時代に昭和天皇を演じる俳優はモックンこと木本雅弘しかいないと原田監督は考えたらしい。それはそれで正解かもしれないが、私に言わせれば意外性がなく面白味に乏しい。今ドキ最も旬な俳優にやらせるとすれば、少し若すぎるかもしれないが、NHK大河ドラマ『八重の桜』で松平容保を演じ、『白ゆき姫殺人事件』(14年) (『シネマーム32』227頁参照) と『そこのみにて光輝く』(14年) (『シネマーム32』166頁参照) で第88回キネマ旬報ベスト・テン主演男優賞を受賞した綾野剛にやらせてみても面白かったのでは・・・?

<閣議決定は難しい!>

今年の8月15日の「安倍談話」に向けては、①村山談話と小泉談話を継承するのか否か、②「侵略」と「植民地支配」、そして「痛切な反省」と「心からのおわび」という4つのキーワードのすべてを入れるのか、それとも「おわび」が抜けるのか、③閣議決定を経たうえでの総理大臣談話なのか、それとも「総理大臣の談話」なのか、等々の論点が事前に出され、国内外から大いに注目されていた。その結果はご承知のとおりで、中国と韓国からの批判も最少限にとどまったのは幸いだった。村山談話は1285字、小泉談話も1135字だったのに対し、安倍談話は3354字だから、ボリュームは圧倒的に多い。これは過去のおわびの部分と「先の世代に謝罪を続ける宿命を負わせてはならない」という未来志向の部分を明確に区別しようとしたためで、それはそれで十分意味があるものだった。

しかし、本作にみる玉音放送の文章を練る閣議の様子を見てみると、「戦勢日に非にして」を「戦況必ずしも好転せず」とあらためるべきか否か、等の議論で時間を浪費する姿が見えてくる。それはそれで大切なことだが、広島に統いて長崎に原爆が投下され、明日にでもソ連が北海道に侵入してこようかという時に閣議でこんな枝葉末節の(?)議論をしていていいの・・・?

<閣議のシステムは?明治憲法の勉強が不可欠!>

私は2011年3月11日に発生した東日本大震災の後、朝日新聞「ニッポン前へ委員会」が企画した「東日本復興計画私案」に「震災復興大臣を国民投票で!」というタイトルで応募した。これは、震災復興大臣に本当に復興の「権限」をもたせるためには、その権力の源泉として国民による直接投票が不可欠と考えたためだ。もちろん、そのためには憲法や現行法をいろいろと見直す必要があるが、私なりにそれも可能と考えて論文を提出したが、結果は残念ながら・・・。

大東亜戦争(太平洋戦争)は現行の憲法ではなく明治憲法にもとづいて実行されたものだから、本作が描く戦争終結に至るプロセスや法的手続きもすべて明治憲法にもとづくことになっているのは当然。しかし、それを理解するためには明治憲法そのものと、その明治憲法下の法システムについて、かなりのお勉強が必要。本作が描くストーリーを見ているだけでは、到底それを理解することはできないはずだ。本作は昭和天皇の2度にわたる「ご聖断」とそれを主導(画策)した鈴木総理の知恵というところに焦点をあてているが、決してポイントはそれだけではない。

そんなことを考えながら、明治憲法下における「元首」としての天皇陛下の地位を大前提として(現憲法では天皇は象徴にすぎない)、本作に観る閣議を中心とした戦争終結へのプロセスをしっかり勉強したい。

<畠中少佐を中心とした若手将校の決起をどうみる?>

岡本喜八版で畠中少佐を演じた黒沢年雄は当時23歳だったので、本作で畠中少佐を演じた松坂桃李は27歳。原田監督の要請に応じて喜んで坊主頭になってくれたうえ、当時の軍人の所作はほぼ完璧に収得しているが、黒沢年雄と同じくいかんせん若すぎる。岡本版でも畠中少佐の狂気性(?)が際立っていたが、松坂桃李演ずる本作の畠中もそれは同じ。そのうえ、畠中が属している陸軍省軍務課の中での僚友である竹下正彦(関口晴雄)、井田正孝(大場泰正)、椎崎二郎(田島俊弥)らとの議論を聞いていても、みんなあまり頭がよくなさそうのが最大の欠点。1931年9月18日の満州事変を画策した当時の石原莞爾中将や板垣征四郎高級参謀らと比べると、そのレベルの差は明らかだ。

また、高倉健主演の『海峡』(82年)を観れば、田舎出身の若手将校たちの憂国の情と堕落した陸軍幹部に対する憤怒の気持が十分に伝わってくるから、1936年の二・二六事件はある意味必然で仕方なしと思える面もある。しかし、本作で畠中たちが見せる近衛師団長・森赳(高橋耕次郎)の殺害と二セの師団命令の作成、そして玉音版強奪作戦の実行は時間的に切迫していることを割り引いても、いかにも稚拙。きっと彼らの頭の中には戦争継続(本土決戦)かそれとも和平(ポツダム宣言受諾)かという論点の設定すらできず、思考停止状態になっていたのだろう。すると、ひょっとしてそれは、安保法制の国会での議論が続く中、その法案を「戦争法案」と称し、何が何でも平和とばかりに法案自体に拒否反応を示す今の日本の世情と同じかも・・・?

<映像上も物語上も、昭和天皇がこれだけのウエイトを!>

本作はいわゆる「青春群像劇」ではないが、パンフレットで原田監督が「昭和天皇と阿南惟幾陸相、そして鈴木貴太郎首相の3人を中心とする“家族”的ドラマです」と言っているように、この3人を中心とし、歴史上の動きにあわせた人間ドラマになっている。後半は畠中少佐ら決起部隊による「反乱」というドラマティックな要素も入ってくるが、前半はホントに淡々と歴史的事実に沿って、原田流解釈に沿った人間ドラマが展開していく。したがって、味本作を鵜呑みにすると、鈴木貴太郎首相はこんな人、阿南惟幾陸相はこんな人、そして昭和天皇はこんな人だったんだと思い込んでしまうが、それは危険。本作が描く3人の人物像と、この3人が展開する「家族ドラマ」はあくまで原田監督の視点によるものなのだ(にすぎないのだ)ということを十分認識する必要がある。

岡本喜八版においては、松本幸四郎が演じた昭和天皇はほんの少し姿を見せるだけで、あくまで闇のペールにつつまれていた(?)が、『昭和天皇実録』が公表された今となっては、昭和天皇についても情報公開はいかようにもオーケーとばかりにその人物像が原田監督の視点で描かれる。そりや、イエス・キリストだって、『ベン・ハー』(59年)ではホンの少ししか登場しなかったが、『パッション』(04年) (『シネマーム4』261頁参照) や『サン・オブ・ゴッド』(14年) (『シネマーム35』296頁参照) では、その全体像を堂々とスクリーン上に見せていましたから、昭和天皇だって・・・。

しかし、今の時代に昭和天皇を演じる俳優はモックンこと木本雅弘しかいないと原田監督は考えたらしい。それはそれで正解かもしれないが、私に言わせれば意外性がなく面白味に乏しい。今ドキ最も旬な俳優にやらせるとすれば、少し若すぎるかもしれないが、NHK大河ドラマ『八重の桜』で松平容保を演じ、『白ゆき姫殺人事件』(14年) (『シネマーム32』227頁参照) と『そこのみにて光輝く』(14年) (『シネマーム32』166頁参照) で第88回キネマ旬報ベスト・テン主演男優賞を受賞した綾野剛にやらせてみても面白かったのでは・・・?

<映像上も物語上も、昭和天皇がこれだけのウエイトを!>

本作はいわゆる「青春群像劇」ではないが、パンフレットで原田監督が「昭和天皇と阿南惟幾陸相、そして鈴木貴太郎首相の3人を中心とする“家族的なドラマです」と言っているように、この3人を中心とし、歴史上の動きにあわせた人間ドラマになっている。後半は畠中少佐ら決起部隊による「反乱」というドラマティックな要素も入ってくるが、前半はホントに淡々と歴史的事実に沿って、原田流解釈に沿った人間ドラマが展開していく。したがって、味本作を鵜呑みにすると、鈴木貴太郎首相はこんな人、阿南惟幾陸相はこんな人、そして昭和天皇はこんな人だったんだと思い込んでしまうが、それは危険。本作が描く3人の人物像と、この3人が展開する「家族ドラマ」はあくまで原田監督の視点によるものなのだ(にすぎないのだ)ということを十分認識する必要がある。

岡本喜八版においては、松本幸四郎が演じた昭和天皇はほんの少し姿を見せるだけで、あくまで闇のペールにつつまれていた(?)が、『昭和天皇実録』が公表された今となっては、昭和天皇についても情報公開はいかようにもオーケーとばかりにその人物像が原田監督の視点で描かれる。そりや、イエス・キリストだって、『ベン・ハー』(59年)ではホンの少ししか登場しなかったが、『パッション』(04年) (『シネマーム4』261頁参照) や『サン・オブ・ゴッド』(14年) (『シネマーム35』296頁参照) では、その全体像を堂々とスクリーン上に見せていましたから、昭和天皇だって・・・。

しかし、今の時代に昭和天皇を演じる俳優はモックンこと木本雅弘しかいないと原田監督は考えたらしい。それはそれで正解かもしれないが、私に言わせれば意外性がなく面白味に乏しい。今ドキ最も旬な俳優にやらせるとすれば、少し若すぎるかもしれないが、NHK大河ドラマ『八重の桜』で松平容保を演じ、『白ゆき姫殺人事件』(14年) (『シネマーム32』227頁参照) と『そこのみにて光輝く』(14年) (『シネマーム32』166頁参照) で第88回キネマ旬報ベスト・テン主演男優賞を受賞した綾野剛にやらせてみても面白かったのでは・・・?

<閣議のシステムは?明治憲法の勉強が不可欠!>

私は2011年3月11日に発生した東日本大震災の後、朝日新聞「ニッポン前へ委員会」が企画した「東日本復興計画私案」に「震災復興大臣を国民投票で!」というタイトルで応募した。これは、震災復興大臣に本当に復興の「権限」をもたせるためには、その権力の源泉として国民による直接投票が不可欠と考えたためだ。もちろん、そのためには憲法や現行法をいろいろと見直す必要があるが、私なりにそれも可能と考えて論文を提出したが、結果は残念ながら・・・。

大東亜戦争(太平洋戦争)は現行の憲法ではなく明治憲法にもとづいて実行されたものだから、本作が描く戦争終結に至るプロセスや法的手続きもすべて明治憲法にもとづくことになっているのは当然。しかし、それを理解するためには明治憲法そのものと、その明治憲法下の法システムについて、かなりのお勉強が必要。本作が描くストーリーを見ているだけでは、到底それを理解することはできないはずだ。本作は昭和天皇の2度にわたる「ご聖断」とそれを主導(画策)した鈴木総理の知恵というところに焦点をあてているが、決してポイントはそれだけではない。

そんなことを考えながら、明治憲法下における「元首」としての天皇陛下の地位を大前提として(現憲法では天皇は象徴にすぎない)、本作に観る閣議を中心とした戦争終結へのプロセスをしっかり勉強したい。

<畠中少佐を中心とした若手将校の決起をどうみる?>

岡本喜八版で畠中少佐を演じた黒沢年雄は当時23歳だったので、本作で畠中少佐を演じた松坂桃李は27歳。原田監督の要請に応じて喜んで坊主頭になってくれたうえ、当時の軍人の所作はほぼ完璧に収得しているが、黒沢年雄と同じくいかんせん若すぎる。岡本版でも畠中少佐の狂気性(?)が際立っていたが、松坂桃李演ずる本作の畠中もそれは同じ。そのうえ、畠中が属している陸軍省軍務課の中での僚友である竹下正彦(関口晴雄)、井田正孝(大場泰正)、椎崎二郎(田島俊弥)らとの議論を聞いていても、みんなあまり頭がよくなさそうのが最大の欠点。1931年9月18日の満州事変を画策した当時の石原莞爾中将や板垣征四郎高級参謀らと比べると、そのレベルの差は明らかだ。

また、高倉健主演の『海峡』(82年)を観れば、田舎出身の若手将校たちの憂国の情と堕落した陸軍幹部に対する憤怒の気持が十分に伝わってくるから、1936年の二・二六事件はある意味必然で仕方なしと思える面もある。しかし、本作で畠中たちが見せる近衛師団長・森赳(高橋耕次郎)の殺害と二セの師団命令の作成、そして玉音版強奪作戦の実行は時間的に切迫していることを割り引いても、いかにも稚拙。きっと彼らの頭の中には戦争継続(本土決戦)かそれとも和平(ポツダム宣言受諾)かという論点の設定すらできず、思考停止状態になっていたのだろう。すると、ひょっとしてそれは、安保法制の国会での議論が続く中、その法案を「戦争法案